

# くび うま じょうやとう 首なし馬の常夜燈

「やとうはん」と呼ばれて広く親しまれている常夜燈が建てられている所には、いろいろな話があったようです。

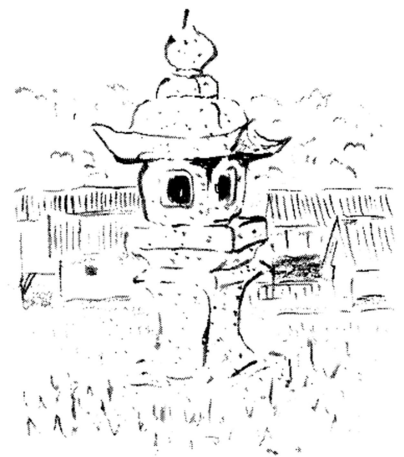
下萩原の滝の宮はんというあたり一帯は、広い竹林で寂しいところでした。

昔、首のない馬が出てきて鳴きながら走り廻るこわい話を母から聞いております。ある年、牛が次々に死んだり、いろいろと悪いことが続きました。人々が話し合って、滝の宮からお守りを戴き、常夜燈を建てて供養したところピタッとやみました。

この後はこのようなことがなくなりました。この常夜燈は夕方になると灯を点し、地域中総出で毎年祭りを続けています。世話はどうやら、あ、このころ、のこ、私の子どもの頃は滝の宮はんは牛の神様だから悪いことをしたらあかんぞと言われたものです。牛は百姓の宝だったのです。

また、子どもの頃の滝の宮の往還(道路)で遊んで来いとよく言われました。「コヂヌケミチ」と今も言います。昔、殿様や巡見使が通るための御巡見道なので往還(オツカンと訛る)と呼んでいました。(今の十一号線のような幹線道路でしょう)この道に沿って常夜燈があり、電燈のつくまでは、交替で夕方に灯を点すことが習慣として残っていたのです。

ここの首なし馬は主人をなくした馬「首なし馬」が主人を探し求めて鳴いた悲しいいなきではなかったのでしょうか。夜の闇に紛れて落ち延びた一行にはぐれて、ここで命を落とした乳母の悲しい話は今に伝わって有名な物語となっています。ここの



お乳神さんの祠は、天正の兵乱に焼けた藤目城の乳母の魂を供養しています。

この物語のあらすじは、天正四年（二五七六）正月から九月にかけて、土佐の長曾我部元親の軍勢とたびたび争いがあり、五月と九月には大きな争いとなりました。二度目の九月三日には土佐軍の火矢の詭計に引掛かり、城主重之はじめ五十余人は自害し、城館は焼け落ちました。この時再起を謀り、幼少の家族は家来に守られて夜のやみに紛れてわかれわかれに落ち延びました。中でも、中姫八幡宮まで落ち延びた若君は、後を追ってきた敵に、老臣大喜多四良左衛門といっしょに討たれて七歳の若さで哀れな最後を遂げました。十輪寺の矢受地藏尊、近くの姫塚、長刀塚、射場の姫塚、福田の姫塚、下萩原のお乳神さんなどは、数々の悲しいあとだと今も語り継がれています。



〈齋藤 茂〉

『ふるさとむかしむかし』大野原町より